TOP MUSEUM

東京都写真美術館ニュース
eyes111

野口里佳　不思議な力

恵比寿映像祭 2023

eyes TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM
NEWS MAGAZINE / 2022 Vol.111

上:《海底 #1》 2017年 大林コレクション／表紙:《きゅうり 8月21日》2017年 作家蔵

作家インタビュー

「野口里佳 不思議な力」

Noguchi Rika: Small Miracles

「野口里佳 不思議な力」展は、これまで30年にわたって〈フジヤマ〉(1997－)、〈飛ぶ夢を見た〉(2003)、〈太陽〉(2005－08)など独自の写真・映像表現を国内外の展覧会で発表し、国際的にも高い評価を受けてきた写真家・野口里佳の東京都写真美術館における初個展です。

初期作品〈潜る人〉(1995)から最新作〈ヤシの木〉(2022)までを含む写真と、映像、ドローイングによって構成される本展ですが、構成を検討しながら野口が自身の作品について発見したことがあったと言います。主な出品作についてうかがいながら、創作活動全般に通底するというその秘密について迫ります。

── 今回の個展は、この十年ほどのあいだに制作された作品を中心に構成されるそうですが、“飛ぶもの”をテーマにした最新作も出品されますね。

展覧会のことを考えているとき、タイトルとして最初に思い浮かんだのが「ボラ・クジャク・クマンバチ」でした。飛ぶことは知っていても、飛ぶところを見たことがない鳥とか、なかなか実際には見る機会がない瞬間を作品にしたいと思ったんです。

── 人間が作り出した飛行機やヘリコプターなどの人工物ではなく、自分の力で飛ぶ生き物に興味がある?

飛行機もとても気になるんですけど(笑)、今回は生き物を追いかけています。

── 振り返れば、“飛ぶもの”に対する興味は創作活動の初期からずっとお持ちでしたね。作品集にまとめられた『鳥を見る』(2001)や『飛ぶ夢を見た』(2004)などを思い出しました。

重力から解放されていくもの、宙にいるものに、ずっと心惹かれているんだと思います。

── このプロジェクトは現在進行形ということもあり、展覧会では撮影に成功した作品が出品されるわけですね。出品作の《クマンバチ #1》(2019)は、どのように撮影されたのでしょうか?

撮影地は、宮城県石巻市の鮎川浜です。リボーンアート・フェスティバルという芸術祭に参加するために滞在していたんですが、山に入るととにかく虫がたくさんいて、必ずなにかに刺されてしまうんです。ある日いつもお弁当を食べていた場所にたくさんのクマンバチがいて、最初は怖くてすぐに退散したんです。でも後から調べてみると、クマンバチはめったに刺さないことがわかり、「いつまでも虫から逃げていてはいけない、虫と向き合ってみよう!」と、写真に撮り始めました。

── 撮影にはどのような機材を使ったのでしょうか? 縁のあたりが円形に暗く写っていて、独特のイメージになっていますよね。

管を切って改造した胃カメラで撮影しています。いつも私のカメラを修理してくれている友人が、「使ってみる?」と貸してくれたんです。小さいものを撮るのに向いているはずと考えていたところに、クマンバチと出会って、作品になってゆきました。

── かつてピンホールカメラで制作されたこともありましたし、メカ・マニアというと大袈裟かもしれませんが、光学装置や写真機に惹かれるところがあるんでしょうか?

機械そのものにも魅力を感じますし、これで何が写せるんだろう?何ができるんだろうと考えると、とてもワクワクします。

《クマンバチ #1》2019年 東京都写真美術館蔵

身近なところにある宇宙とは？

── 展覧会名は最終的に、〈不思議な力〉（2014）という出品作のシリーズ名からとることになりました。次に、この表題作についてお伺いしたいと思います。〈不思議な力〉の“力”とは、自然界に起きている物理的な現象を指しているのでしょうか？

そうですね。重力や表面張力、磁力といった、目には見えないけど、そこにある力をちょっとした実験で出現させて、写真によって目に見える形にできないか？というところからはじまったシリーズです。制作当時、こどもが生まれたばかりということもあり、それまでのように「明日から1ヶ月アフリカに行ってきます」なんてことはできない状況でしたが、実は身近にもいろんな宇宙がある。それを形にしてみようと思ったんです。

── 身の回りに起きている現象に対しての好奇心を、幼少の頃から持たれてきたのですか？

たしかに、なぜ水を沸かすとお湯になるんだろう？ 地球の自転はどうやったら体感できるだろう？とか、こども時代からいちいち疑問に感じる性分でした。だから常日頃の好奇心を作品化することは、自分にとっては自然なことだったと言えるかもしれないです。

── 実験もご自身でなさったとのこと。《不思議な力 #8》（2014）は、金属のN極とS極を整えると磁石になるという性質を捉えているそうですが、スプーンを握っているのはお子さんですか？

これは娘の手です。夫の手を借りたときもありますし、家族みんなに手伝ってもらいました。

── 撮影機材には、ご自身のお父様が生前に愛用されていたカメラを使用されたとうかがいました。

オリンパスペン Fという、古いフィルム・カメラです。

── 科学実験を撮るという目的だけで考えれば、デジタル・カメラや映像機器のほうが使いやすいようにも思えますが、そのカメラで撮ることに意義があったんですね？

私も同じカメラを使って、自分の日常の中から作品を立ち上げてみようという意図が根底にあって始めた作品でした。発表当時、個展で一緒に展示した〈父のアルバム〉シリーズ（2014）は、父が家族を撮影したネガから娘である私が写真を選び、プリントするという作品でしたが、一方、この〈不思議な力〉は今の家族に手伝ってもらいながら制作している。だから私にとっての家族写真でもあるんです。

── 本展では映像作品が出品される〈夜の星へ〉シリーズ（2015）とあわせて、三部作になっているそうですね？

〈夜の星へ〉は出品作の映像だけでなく、オリンパスペン Fで撮影した写真作品もあります。かつて住んでいたベルリンのスタジオからバスで自宅へ帰る道のりを、1本のフィルムで撮影し、最初から最後まですべてプリントして1冊の本にまとめました。〈父のアルバム〉は、写真を選ぶことについての作品であり、〈夜の星へ〉は写真を選ばないことについての作品だと思っています。そんな風にこの三つの作品は、私自身の中では三部作のような関係で繋がっています。

すべては“不思議な力”について

── この〈不思議な力〉シリーズを制作したことで発見したこと、もしくは以後の作品で影響したことなどはありますか？

“不思議な力”は、シリーズを制作しているときに浮かんできた言葉でしたが、振り返ってみると、今までやってきたことすべてにも通じるものがあると感じています。

── つまり、身のまわりの現象に対して興味を持つという性分が、以降に制作した作品のテーマや被写体にも影響している？

影響というよりは、振り返ってみればすべてが“不思議な力”についての作品だったと言った方がいいかもしれないです。

── もしかしたら、表現媒体に写真を選択した頃からとも言える？

今回の展示構成を検討しているときに、学芸員の石田さんから初期作品の〈潜る人〉（1995）も含めることを提案されたんです。潜水士を写真に撮るためにダイビングの資格を取り、海に潜って撮影したシリーズですが、地上とは異なる重力を体感した水中での経験などを思い出すと、これも広い意味で“不思議な力”についての作品と言えるのではないかと、腑に落ちたところがありました。

── 写真家としておよそ30年間歩んでこられましたが、今現在、取り組んでいることや課題はありますか？

最近、映像作品を作ることが増えたんですが、やはり写真にはない難しさと豊かさがあります。また、過去の作品同士が、時間を経ることで思いがけず繋がって、作品世界がより豊饒に広がっていく面白さも感じるようになりました。まだまだやるべきことはたくさんある、そういう思いを忘れずに創作を続けていきたいと思っています。

── 〈夜の星へ〉のほかにも映像作品は出品されるんですか？

《不思議な力 #8》2014年 アマナコレクション

《夜の星へ》（映像作品）2015年 作家蔵

《潜る人 #1》1995年 作家蔵

〈虫、木の葉、鳥の声〉(2019)と、〈アオムシ〉(2019)をあわせて上映する予定です。

――なぜアオムシを映像の被写体に?

アオムシも空中にいるんですよ。木からぶら下がって、風に揺られながら木から木へと移っていくんですが、その様子を映像に撮っています。

――いかにも野口さんらしい着眼点ですね!

私がやっていることはずっと、小学生のこどもみたいですよね(笑)。

――ご自身をてらいなく「小学生みたい」とおっしゃるところに、絶えず身近な世界に好奇心を抱き、撮りたいと思えば海の底にも、アフリカの奥地にも躊躇なく飛び込んでしまう原動力の秘密があるような気がします。

すごく身近なところに未知なるものはまだまだたくさんあるし、私の写真が見てくださる方にとって発見のきっかけになったり、今いる世界がより豊かになるような作品を作りたいと、いつも思っています。

(インタビュー・構成　富田秋子)

《ヤシの木 #3》2022年 作家蔵

表紙、P1–5の図版は全て
© Noguchi Rika, Courtesy of Taka Ishii Gallery

野口里佳 不思議な力

Noguchi Rika: Small Miracles

2F 2022.10.7|金| – 2023.1.22|日|

野口里佳は1995年「写真『3.3㎡(ひとつぼ)展』」と1996年「写真新世紀」展でのグランプリ受賞以降、〈フジヤマ〉(1997年–)、〈飛ぶ夢を見た〉(2003年)、〈太陽〉(2005–08年)、〈夜の星へ〉(2014–15年)などの写真・映像作品を国内外の展覧会で発表し、国際的にも高い評価を受けている写真家です。野口はこれまでに、水中や高地、宇宙といった未知の領域と人間との関わりをテーマにした作品を手がけてきました。近年では、日常や周囲に満ちる無数の小さな謎の探求を通して、見るものの感覚や想像を解き放つような表現を追求しています。写真と映像、ドローイングによって構成される本展は、初期作品〈潜る人〉(1995年)から最新作〈ヤシの木〉(2022年)までを出品作品に含み、時間や場所も超えていく写真の「不思議な力」に導かれるように、野口がこれまでに出会ってきた様々な現象や光景が描き出されます。その独自の作品表現に触れることは、それぞれの存在がこの世界に生きていることの意味を見つめ直し、また写真・映像のもつ「不思議な力」とは何なのかを考えるきっかけとなることでしょう。

野口里佳(1971年 ―)

さいたま市出身。那覇市在住。展覧会を中心に写真・映像作品を発表。現代美術の国際展にも数多く参加している。2002年、第52回芸術選奨文部科学大臣新人賞(美術部門)を受賞。作品は東京国立近代美術館、国立国際美術館、グッゲンハイム美術館、ポンピドゥセンターなどに収蔵されている。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※2023.1.2(月)、3(火)は無料。開館記念日のため1.21(土)は無料。
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。
[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

関連イベント

会期中に関連事業を開催する予定です。

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

見るは触れる 日本の新進作家 vol.19

Seeing as though touching　Contemporary Japanese Photography vol.19

3F 2022.9.2|金| – 12.11|日|

写真・映像の可能性に挑戦する創造的精神を支援し、将来性のある作家を発掘する「日本の新進作家」展。第19回目となる本展では、写真・映像イメージの持つテクスチュア(手触り)を起点に、写されたイメージのみならず、イメージの支持体となるメディアそれ自体への考察をうながす、5名の新進作家の試みをご紹介します。

本展でご紹介する、水木塁、澤田華、多和田有希、永田康祐、岩井優による写真・映像作品は、視覚を通しその物質としての手触りを想起させます。さらに、わたしたちが今見ているイメージとは、どのような物質から構成されているのか、イメージの生成プロセスのみならず、写真・映像メディアの本質へと目を向けさせます。5名の作家による探求を通し、多様化する写真・映像メディアの現在地を捉える機会となるでしょう。

多和田有希〈I am in You〉2018年　Courtesy of rin art association

関連イベント

会期中に出品作家によるトーク、学芸員による展示解説、手話通訳付き展覧会トークを開催する予定です。最新情報は当館ホームページをご参照ください。

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。
[主催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館／東京新聞　[助成] 芸術文化振興基金　[協賛] 東京都写真美術館支援会員　[後援] J-WAVE 81.3FM

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

写真新世紀 30年の軌跡 写真ができること、写真でできたこと

The 30th Anniversary of the New Cosmos of Photography
What Photography Can Do; What Has Been Done by Photography.

B1F 2022.10.16|日| – 11.13|日|

「写真新世紀」は、1991年にスタートした公募形式によるキヤノンの文化支援プロジェクトです。2021年度をもって公募は終了しましたが、これまでに行った44回の公募から1,038組の受賞者が誕生しています。本展は、一般投票から選ばれた歴代受賞10作品をご紹介し、30年間の歩みを振り返ります。

写真新世紀展2021会場写真

[観覧料] 無料
[主催] キヤノン株式会社　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

〈お問い合わせ〉キヤノン 写真新世紀事務局 03-5482-3904
〈公式サイト〉https://global.canon/ja/newcosmos/

恵比寿映像祭2023 Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions 2023

恵比寿映像祭

Yebisu International Festival for Art & Alternative Visions

恵比寿映像祭は、平成21(2009)年の第1回開催以来、年に一度恵比寿の地で、展示、上映、ライヴ・パフォーマンス、トーク・セッションなどを複合的に行なってきた映像とアートの国際フェスティヴァルです。映像分野における創造活動の活性化と、映像表現やメディアの発展をいかに育み、継承していくかという課題について広く共有する場となることを目指してきました。

「映像とは何か」という問いを投げかけながら、国内外の映像表現を紹介してきた10年以上の歳月のなかで、映像を取り巻く状況は大きく変化してきました。このような映像をめぐる社会状況の変化のなかで、「映像とは何か」という問いを引き続き深めていくために、**15回目を迎える恵比寿映像祭2023からは、「コミッション・プロジェクト」をはじめとする、いくつかの新たな試みを開始**することで、映像祭の役割をさらに強化していきます。

総合テーマ「テクノロジー?|Technology?」

私たちが日常目にする映像技術である、写真、映画、ヴィデオやアニメーション。これら映像表現のテクノロジーは、19世紀以降、大きく発展し、今日では高解像度のイメージや、より長時間の映像を処理することができるようになりました。映像技術は、より高精細で、より情報量の多いイメージを作ることを目指して発展してきたと言っても良いかもしれません。

技術には、一般化されて広く共有され、定着していくという側面がありますが、共有されるための規範は、誰が、いつ、どのように決めるのでしょうか? 今当たり前に見ている高精細の映像が、100年後にどのようなリアリティとして受け止められるのかは誰も予測できません。歴史を振り返ったとき、技術が思いがけない要素として、働いていた、ということを発見することがあります。例えば、高解像度の映像の中に、あえて手作りの感触を含めることで、臨場感を高めるなど、時にアーティストの表現は、そうした技術の対話の中から生み出され、思いもよらない発見をする可能性を持っています。

恵比寿映像祭2023では、「テクノロジー?」というテーマを通して、多種多様な映像表現の実践を検証し、アートと技術との対話の可能性を考察していきます。

会期:令和5年2月3日(金)–2月19日(日)[15日間]
時間:10:00–20:00(※2月19日は18:00まで)
料金:入場無料 ※一部のプログラム(上映など)は有料 ※オンラインによる 日時指定予約を推奨いたします。

会場:東京都写真美術館/恵比寿ガーデンプレイス センター広場/地域連携各所 ほか [主催] 東京都/公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/日本経済新聞社 [共催] サッポロ不動産開発株式会社 [後援] J-WAVE 81.3FM [協賛] 東京都写真美術館支援会員

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

コミッション・プロジェクト

コミッション・プロジェクトは3月26日（日）まで開催
2月21日（火）-3月26日（日）は10:00-18:00（木・金曜は20:00まで）

恵比寿映像祭2023では、日本を拠点に活動する新進作家4名を選出し、制作委嘱した映像作品を「新たな恵比寿映像祭」の成果として発表する「コミッション・プロジェクト」を開始します。映像表現に通じた国内外の有識者5名の審査委員により選出された作家は、東京都写真美術館の3F展示室で新作の未発表作品を発表。また、会期中に4作品のなかから特別賞を決定します。なお、コミッション・プロジェクトのみ通常会期を延長して、2023年3月26日まで展示します。

審査委員

沖 啓介（メディア・アーティスト、東京造形大学特任教授）
斉藤綾子（映画研究者、明治学院大学教授）
レオナルド・バルトロメウス（ルアンルパ／山口情報芸術センター[YCAM]キュレーター）
メー・アーダードン・インカワニット（映画・メディア研究者、キュレーター、ウェストミンスター大学教授）
田坂博子（東京都写真美術館学芸員、恵比寿映像祭キュレーター）

審査運営事務局：特定非営利活動法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT / エイト]

恵比寿映像祭2023 コミッション・プロジェクト 選出アーティスト

荒木 悠 ARAKI Yu

ワシントン大学で彫刻を、東京藝術大学では映像を学ぶ。日英の通訳業を挫折後、誤訳に着目した制作を始める。英語圏において、「鋳造」と「配役」がどちらも「キャスティング（casting）」と呼ばれていることを起点に、オリジナルからコピーが作られる過程で生じる差異を再現・再演・再生といった表現手法で探究している。2019年フューチャージェネレーション・アートプライズのファイナリストに選出。2020-21年度アーツコミッション・ヨコハマU39アーティストフェロー。

金 仁淑 キム・インスク KIM Insook

漢城大学芸術大学院（韓国）西洋画科写真映像コースに留学後、15年間のソウル暮らしを経てソウルと東京を拠点に制作活動を展開。「多様であることは普遍である」という考えを根幹に置き、「個」の日常や記憶、歴史、伝統、コミュニティ、家族などをテーマに制作を行い、写真、映像を主なメディアとして使用したインスタレーションを発表している。2008年光州市立美術館で個展「sweet hours」開催。大邱フォトビエンナーレ、森美術館、東京都写真美術館など、国内外の芸術祭や企画展に参加。

葉山 嶺 HAYAMA Rei

野生動物や環境問題と深く関わる特殊な環境で幼少期を過ごす。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科で学び、2008年より映像制作を始める。自然と人間との調和を求める作品は、人間中心的な視点から失われたり、無視されたりする自然や生き物を中心に展開され、人間には見ることができない「自然の現実の層」を人間の想像力の中に浮かび上がらせる。近年では、2020年釜山ビエンナーレほか、国内外の美術館で作品を発表。

大木 裕之 OKI Hiroyuki

東京大学工学部建築学科在学中の1980年代前半より映像制作を開始。1990年にイメージフォーラム・フェスティバル審査員特別賞、1996年に第46回ベルリン国際映画祭ネットパック賞受賞。その表現活動は映像に留まらず、ドローイング、インスタレーション、パフォーマンスにまで及ぶ。世界各地を移動し生活と哲学の相関関係を探り、動的ネットワークで複雑に構成される世界を描く。独特で詩的な表現は国内外で高く評価され、国際展及び映像祭に多数参加。

撮影：西村知巳

星野道夫
悠久の時を旅する

Hoshino Michio: The Eternal Journey

B1F 2022.11.19|土|–2023.1.22|日|

少年のころから北の自然に憧れ、極北の大地アラスカに生きた星野道夫。20歳のときに初めて足を踏み入れたアラスカの村の記録から、亡くなる直前まで撮影していたロシアのカムチャッカ半島での写真までを一望すると同時に、貴重な資料展示を交え、旅を終えることなく急逝した星野道夫の足跡をたどります。

[観覧料] 一般1,000円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。
[主催] クレヴィス　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館　[協力] 星野道夫事務所　[後援] 目黒区

〈お問い合わせ〉クレヴィス 03-6427-2806　info@crevis.co.jp
〈公式サイト〉www.crevis.co.jp

ホッキョクグマ カナダ、ハドソン湾　撮影：星野道夫 ©Naoko Hoshino

深瀬昌久展

2F 2023.3.3|金|–6.4|日|

新宿ゴールデン街での転落事故により、1992年から療養生活を余儀なくされ、2012年に帰らぬ人となった伝説的写真家、深瀬昌久は、1960–70年代に『カメラ毎日』を主な発表の場として、同時代の森山大道、荒木経惟、土田ヒロミらとともに、日本の写真を切りひらきました。本展では、深瀬の活動の軌跡を辿るとともに、特異なる作家像に迫ります。

《襟裳岬》〈鴉–Ravens〉1976年 東京都写真美術館蔵

作品予定作品
〈豚を殺せ〉、〈洋子〉、〈烏–Ravens〉、〈父の記憶〉、〈ブクブク〉ほか

[観覧料] 一般700円 ほか 各種割引あり
※オンラインによる日時指定予約を推奨いたします。詳しくは当館ホームページをご参照ください。

[主催] 東京都／公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館　[協賛] 東京都写真美術館支援会員

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

国際写真賞 プリピクテジャパンアワード

Prix Pictet Japan Award

3F 12.17|土|–2023.1.22|日|

写真とサステナビリティに関する国際写真賞プリピクテは、これまで日本を活動拠点とする写真家を対象にしたプリピクテジャパンアワードを設けてきました。今回で3回目となる本アワードでは、「火、水」をテーマに、新進作家や中堅作家の中からショートリストに選ばれた8名の写真家の作品を展示致します。本年度の賞の受賞者は4名の審査委員によって選出され、展覧会の開催初日に発表されます。

©Prix Pictet

〈お問い合わせ〉プリピクテ事務局 prixpictet@candlestar.co.uk
[観覧料] 無料　[主催] プリピクテ　[共催] 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

1F HALL / 上映

最新の
上映スケジュールは
こちら▶

1F ドキュメンタリー映画「岡本太郎の沖縄」（完全版）

日本を代表する芸術家・岡本太郎（1911–1996）。日本人としてのアイデンティティを探し求めて旅した岡本太郎が60年以上前の沖縄で捉えたのは、素っ裸で生きる人々の“痛切な生命（いのち）のやさしさ”でした。「岡本太郎の沖縄」は、今の私たちに何を投げかけ、そしてどうつながるのか？それを確かめにもう一度、“岡本太郎の沖縄”を旅するドキュメンタリー映画。前作から取材を重ねながら、再構成・再編集した完全版を上映します。

監督–製作–構成–編集 / 葛山喜久　語り / 井浦新
2022年／日本／127分／DCP

[上映期間] 2022.10.25（火）–11.11（金）
[休映日] 2022.10.31（月）、11.5（土）、6（日）、7（月）
[料金] 一般1,700円、学生（大学・専門・高校）1,400円、シニア（60歳以上）・中学生以下（3歳以上）・障害者手帳をお持ちの方とその介護者（2名まで）1,100円

〈お問い合わせ〉シンプルモンク（岡本太郎の沖縄製作委員会）
katsux@hotmail.com

© 2022シンプルモンク/
岡本太郎の沖縄製作委員会

※事業は諸般の事情により変更することがございます。
最新情報は当館ホームページでご確認ください。

支援会員

東京都写真美術館の活動をご支援いただくため、
次の企業・団体に支援会員としてご入会いただきました。

《特別賛助会員》
キヤノン(株)
(株)資生堂
全日本空輸(株)
(株)ニコン

《賛助会員》
キヤノンマーケティングジャパン(株)
ゲッティイメージズジャパン(株)
大日本印刷(株)
東急建設(株)
凸版印刷(株)
富士フイルム(株)

《特別支援会員》
アサヒグループホールディングス(株)
サッポロ不動産開発(株)
サッポロホールディングス(株)
ピクテ・ジャパン(株)
リコーイメージング(株)

《支援会員》
(株)アール&キャリア
(株)I&S BBDO
あいおいニッセイ同和損害保険(株)
アオイネオン(株)
(株)浅沼商会
旭化成(株)
(株)朝日工業社
朝日新聞社
(株)朝日新聞出版
朝日生命保険(相)
(有)アスペン/POLARIS
(株)アマナ
(株)岩波書店
(株)潮出版社
(株)栄光社
(株)エージーピー
(株)ADKクリエイティブ・ワン
(一財)AVCC・霞が関ナレッジスクエア(KK²)
SMBC日興証券(株)
NHK営業サービス(株)
(株)NHKエデュケーショナル
(株)NHKエンタープライズ
(株)NHK出版
(株)NHKテクノロジーズ
(株)NHKビジネスクリエイト
ENEOSホールディングス(株)
エルメス財団
OMデジタルソリューションズ(株)
カールツァイス(株)
花王(株)
鹿島建設(株)
(株)KADOKAWA
カトーレック(株)
神奈川新聞社
カメラショップ(株)
カルチュア・コンビニエンス・クラブ(株)
(株)キクチ科学研究所
(株)キタムラ
キッコーマン(株)
(株)紀伊國屋書店
ギャラリー小柳
共同印刷(株)
(一社)共同通信社
空港施設(株)
(株)久米設計
グローリー(株)
(株)ケー・アンド・エル
興亜硝子(株)
(株)弘亜社
(株)公栄社
(株)廣済堂
(株)講談社
(株)光文社
(株)国書刊行会
(株)コスモスインターナショナル
小山登美夫ギャラリー(株)
佐川印刷(株)
三愛オブリ(株)
三機工業(株)
産経新聞社
サントリーホールディングス(株)
(株)ジェイアール東日本企画
JSR(株)
(株)JTB
(株)シグマ
(株)実業之日本社
信濃毎日新聞社
清水建設(株)
(株)写真弘社
写真の学校/東京写真学園
シャネル(同)
(株)集英社
シュッピン(株)
(株)小学館
松竹(株)
信越化学工業(株)
(株)新潮社
(株)スタジオアリス
(株)スタジオエムジー
(株)スタジオジブリ
(株)SUBARU
住友生命保険(相)
(株)住友倉庫
(株)生活の友社
セイコーホールディングス(株)
(株)西武・プリンスホテルズワールドワイド
双日(株)
ソニーグループ(株)
損害保険ジャパン(株)
第一生命保険(株)
第一法規(株)
台新國際商業銀行
大成建設(株)
大和証券(株)
(有)タカ・イシイギャラリー
(株)髙島屋
(株)宝島社
(株)竹中工務店
(株)タニタ
(株)タムロン
(株)丹青社
(株)中央公論新社
中外製薬(株)
(株)TBSテレビ
デジタル・アドバタイジング・コンソーシアム(株)
(株)テレビ朝日
(株)テレビ東京
(株)電通
東亜建設工業(株)
東映(株)
(株)東京印書館
東京空港交通(株)
東京工科大学/日本工学院
東京工芸大学
東京新聞・中日新聞社
(株)東京スタデオ
東京造形大学
東京綜合写真専門学校
(株)東京ダイケンビルサービス
東京建物(株)
東京地下鉄(株)
東京テアトル(株)
東京都競馬(株)
(株)東京ニュース通信社
(学)専門学校 東京ビジュアルアーツ
(株)東京美術倶楽部
東京メトロポリタンテレビジョン(株)
(株)東芝
東宝(株)
(株)東北新社
(株)東洋経済新報社
(株)徳間書店
戸田建設(株)
(株)トロンマネージメント
(株)ニコンイメージングジャパン
日油(株)
日活(株)
日機装(株)
(株)日経BP
日光ケミカルズ(株)
日本空港ビルデング(株)
日本経済新聞社
日本航空電子工業(株)
(株)日本廣告社
(公社)日本広告写真家協会
日本写真印刷コミュニケーションズ(株)
(公社)日本写真家協会
(公社)日本写真協会
日本写真芸術専門学校
日本生命保険(相)
日本大学芸術学部
(株)日本デザインセンター
(株)ニッポン放送
日本レコードマネジメント(株)
日本ロレックス(株)
野村證券(株)
(株)博報堂
(株)博報堂DYメディアパートナーズ
(株)博報堂プロダクツ
(株)ハーツ
パナソニック(株)
(株)パラゴン
(株)バンダイナムコフィルムワークス
ぴあ(株)
北海道 写真の町東川町
(株)美術出版社
(株)ビックカメラ
(株)ピラミッドフィルム
(株)ファーストリテイリング
(株)フェドラ
(株)フジテレビジョン
(株)フジヤカメラ店
(株)フレームマン
プロフォト(株)
(株)文化工房
(株)文藝春秋
北海道新聞社
(株)ホテルオークラ東京
本田技研工業(株)
毎日新聞社
丸善雄松堂(株)
マルミ光機(株)
(株)マンダム
(株)みずほ銀行
三井住友海上火災保険(株)
三井倉庫ホールディングス(株)
三井不動産(株)
三菱地所(株)
三菱製紙(株)
三菱倉庫(株)
三菱電機(株)
三菱UFJ信託銀行(株)
武蔵大学
明治安田生命保険(相)
森ビル(株)
ヤマト運輸(株)
(株)吉野工業所
(株)ヨドバシカメラ
読売新聞社
ライオン(株)
ライカカメラジャパン(株)
(株)良品計画
(株)ロボット
(株)ワコウ・ワークス・オブ・アート
(株)ワコール
(他1社)

支援会員の
詳細は
こちら▼

(株)=株式会社、(相)=相互会社、(有)=有限会社、(学)=学校法人、(公社)=公益社団法人、(同)=合同会社、(一社)=一般社団法人
(一財)=一般財団法人

(令和4年9月現在・五十音順)

2F SHOP
ミュージアム・ショップ

NADiff BAITEN

展覧会の開催に合わせて、品揃えがガラリと変わるミュージアム・ショップ。写真集や関連書籍はもちろん、グッズ類も豊富に取り揃えております。2023年の手帳が入荷しました。画家・絵本作家のミロコマチコさんの手帳は予定をたくさん書きこみたくなるような、動物たちでにぎやかなデザインです。

ミロコマチコB6 SLIM DIARY(2022.12-2024.1)
2種　1,320円(税込)

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-18:00(木・金は20:00まで)　[TEL] 03-6447-7684
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

1F CAFE
カフェ

フロムトップ

台湾で人気の屋台飯、ルーロー飯をワンプレートでご用意しています。コラーゲンたっぷりの皮付きの豚肉にこんにゃくを加えた食感楽しいルーロー飯に色鮮やかな野菜を添えました。コーヒーまたは日本茶付き1,500円(税込)。

詳細
ページは
こちら▼

[営業時間] 10:00-21:00 ※当面は10:00-18:00(木・金は20:00まで)
[TEL] 070-8591-3730
[定　休　日] 毎週月曜日 ほか
(美術館の休館日に準じます。詳細は裏表紙をご覧ください。)

SCHEDULE / スケジュール

展覧会・イベント・上映の最新情報は、
topmuseum.jpまたはこちらへ ▶

	3F	2F	B1F	1F
2022 8			イメージ・メイキングを分解する 収 8.9(火)–10.10(月・祝)	
9	見るは触れる 日本の新進作家 vol.19 企 9.2(金)–12.11(日)			
10		野口里佳 不思議な力 収 10.7(金)–2023.1.22(日)	写真新世紀 30年の軌跡 10.16(日)–11.13(日)	ドキュメンタリー映画「岡本太郎の沖縄」(完全版) 10.25(火)–11.11(金)
11				
12	国際写真賞 プリピクテジャパンアワード 12.17(土)–2023.1.22(日)		星野道夫 悠久の時を旅する 11.19(土)–2023.1.22(日)	「眩暈 VERTIGO」 12.13(火)–12.25(日)
2023 1				
2	恵比寿映像祭 2023 2.3(金)–2.19(日)			
3	3F コミッション・プロジェクト 2.3(金)–3.26(日)	深瀬昌久 企 3.3(金)–6.4(日)	APAアワード2023 2.25(土)–3.12(日) アンリ・カルティエ=ブレッソン 3.18(土)–5.14(日)	「ぐるっとパス 2022」 ▼詳細はこちら▼

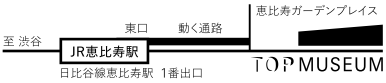
※12月以降に始まる展覧会名はすべて仮称　企 企画展　収 収蔵展

図書室のご案内

現在、図書室のご利用は、2時間ごとの定員入替制を実施しています。(事前予約不要)

写真集を中心に、展覧会カタログ、写真と映像に関する図書、専門雑誌など国内外の資料を11万8千冊以上所蔵しています。また、開催中の展覧会をより楽しめるよう、出品作家の写真集や展覧会のテーマに関する貴重な書籍などをセレクトした関連図書コーナーも開設しています。閲覧を希望する方はどなたでも無料で閲覧できますので、ぜひ4階図書室へお立ち寄りください。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR恵比寿駅東口より徒歩約7分、東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分※当館には専用駐車場はありません。恵比寿ガーデンプレイスの駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel.03-3280-0099　topmuseum.jp

開館時間　10:00–18:00(木・金は20:00まで)※入館は閉館30分前まで。
休 館 日　毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)、年末年始(12/29–1/1、1/4)、臨時休館

東京都写真美術館ニュース「アイズ2022」111号 □発行日:2022年10月7日 □企画・編集:東京都写真美術館管理課企画広報係 □印刷・製本:株式会社公栄社 □発行:公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館©2022 □本誌掲載の記事、写真の無断複写、複製を禁じます。※本誌編集ページに掲載されている観覧料は、原則として消費税込みの価格です。事業内容は諸般の事情により変更することがございます。最新の情報はホームページをご覧ください。